

言語論的転回以降の社会化論の可能性

むくお あさこ
 棕尾 麻子 (慶應義塾大学大学院)

20 世紀の大きな思想的転換のひとつに、「言語論的転回 linguistic turn」があげられる。ウィーン学団に始まり、ローティ Richard Rorty によって広く知られるようになったこの思潮は、ポストモダン、ポスト構造主義などの諸理論と関連しながら、従来の人文・社会科学のパラダイム・シフトに多大な影響力をもたらした。

しかしながら、教育社会学におけるそのインパクト、特に社会化論に対するそれは、これまであまり言及されてこなかったように思われる。本報告は、言語論的転回との関連のもとで社会化論を改めて概観し、今後の展開可能性を見出そうとするものである。

一般に、社会化とは、個人が生活する（しようとする）社会に適切に参加することが可能になるような価値や知識や技能などを、他者との相互作用のなかで習得する過程である、とされる（柴野 1992、渡辺 1992 など）。この過程の内実、およびそれを研究する理論的視角については、言語論的転回を踏まえるとき、再考が迫られよう。

従来論じられてきた社会化は、ある一つの文化体系の下でなされる「一次的」「連続的」な過程であり、その結果としてのアイデンティティもそのようなものとして了解されてきた¹。果たしてそれは妥当なのか、改めて問う必要がある。渡辺 (1996) は、社会化研究の領域として、①社会化の時期、②社会化の内容、③社会化の場、④社会化の背景、の四つの軸を提示しているが、殊に②社会化の内容は、後期近代社会やグローバリゼーションを背景とする、他の三側面の変容、多様化とあいまって、もはや自明のものとはいえない難くなった。そしてその結果としてあらわれるアイデン

ティティの様相もまた、再検討されなければならないだろう。

理論的な潮流をみると、構造機能主義的パラダイムと解釈論的パラダイムという二つの大きなものに分けられる。すなわち、前者はパーソンズ、マートンらに代表されるが、社会化を社会システムの機能要件として考察し、シンボリックインタラクショニズム、エスノメソドロジーなどの系譜である後者は個人の学習過程という側面を強調して社会化を論じている。近年の教育社会学の潮流として、解釈的アプローチが定着しつつあり、社会化研究もまた同じ流れにある。その思想的背景に言語論的転回があることは、いまいちど確認されるべきではないだろうか。

以上の関心のもと、本報告では、まず、言語論的転回を広く知らしめたローティ自身による社会化論、アイデンティティ観を検討する。

言語論的転回とは、普遍的、恒久的な「真理」を追究する研究から「言語」に焦点を当てた研究へとシフトすることを意味する。この転回を踏まえたローティのネオ・プラグマティズムは、従来のプラグマティストの諸論とは一線を画している（柳沼 2002）。すなわち、従来のプラグマティストの経験主義的な立場とは異なり、ローティは「言語」による認識とそれに基づく社会的実践に焦点を当てるのだ。ローティにおいては、全ては「偶然」のあらわれなのであり、（たとえばエリクソンの想定するような）「近代的な」自我の実体性は否定される。自我とは外界との接触によって生じる「信念や欲求の網の目」そのものであって、断じて「それらの信念や欲求をもつ存在」ではない。そしてこの自我と外界を媒介するものこそ、「言

語」なのだ (Rorty 1989=2000)。ここで提示されるのが、「会話」を通じた人間形成／創造を意味する「啓発 edification」概念である (Rorty 1979=1993)。「啓発」は、解釈学的活動であるとともに、新しい言葉や語彙、メタファーを獲得／創造するような「詩的」な活動でもあるという。

さらにローティは（「解釈学的転回」を経て）、その論点を政治的／倫理的なものへと移行させることとなる。彼のいう自己形成、社会化は、他者に対する感受性や想像力を育てる過程であり、ひいては「リベラルな連帯」社会を可能とするものだと主張される。

「反表象主義」、「反本質主義」、「反基礎づけ主義」などと特色づけられるローティのネオ・プラグマティズムの思想は、社会化を公共性へとひらき、政治／倫理的な行為ととらえなおす可能性をもっているといえよう。

しかし、ローティのいうリベラリズムは、保守的だとの批判もある。報告者も、彼の「他者」「差異」の見方はいささか楽観的あるいは単純にすぎるのではないかという疑念をもつ。また、とりわけ 1990 年代以降のローティが展開する文化左翼批判においては、議論に混乱があるようにもみうけられる³。よって本報告では、ローティと、彼が批判する／されるところの「文化左翼」すなわちカルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムにおけるアイデンティティ・ポリティクスの議論や、それに関連するジルー Henry Giroux の批判教育学と対照させることにより、今後の社会化論およびアイデンティティ論の課題と可能性を提示したい。

¹ たとえば、「異文化間教育」とよばれる研究領域では、外国人子女、帰国子女、留学生の「不連続」な文化化（／社会化）の過程（およびその問題解決）として異文化間教育が構想されている（たとえば江淵 1997 など）。これは従来の一般的な社会化観の裏返しといえよう。

² その整理と位置づけに関しては、たとえば稲垣 (1990) を参照。

³ 北田 (2001) を参照。

参考文献：

- 江淵一公, 1994→1997, 『異文化間教育学序説——移民・在留民の比較教育民族誌的分析（第2版）』九州大学出版会。
- Giroux, Henry, 1992, “Resisting Difference: Cultural Studies and the Discourse of Critical Pedagogy,” Grossberg, Lawrence, Cary Nelson and Paula Treichler eds., 1992, *Cultural Studies*, Routledge=1996, 大田直子訳「抵抗する差異——カルチュラル・スタディーズと批判教育学のディスコース」『現代思想』24(7): 129-147.
- 早川操, 1999, 「ポストモダン時代における人間形成理論の展望と現代教育改革の課題——「自己の境界枠を越える行為」における反省と制作の働きに関する考察」『名古屋大学教育学部紀要（教育学）』46(2): 19-46.
- 稲垣恭子, 1990, 「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性——教育的言説と権力の分析に向けて」『教育社会学研究』47: 66-75.
- 北田暁大, 2001, 「政治と／の哲学、そして正義——ローティの文化左翼批判を『真剣に受け止め』、ローティを埋葬する」, 馬場靖雄編, 2001, 『反=理論のアクチュアリティ』ナカニシヤ出版。
- 椋尾麻子, 2002, 「『アーティキュレーション』概念の検討——言語的社会化とアイデンティティとを考えるために」『人間と社会の探究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』55: 55-67.
- Rorty, Richard, 1989, *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press. =2000, 斉藤純一・山岡龍一・大川正彦訳, 『偶然性・アイロニー・連帯——リベラル・ユートピアの可能性』岩波書店。
- , 1979, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press. =1993, 野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書。
- 柴野昌山, 2001, 「文化伝達と社会化——パーソンズからバーンズ・スティーンへ」, 柴野昌山編, 2001, 「文化伝達の社会学」世界思想社。
- , 1992, 「社会化と社会統制」, 柴野昌山・菊池城司・竹内洋編, 1992, 『教育社会学』有斐閣: 50-70.
- 柳沼良太, 2002, 『プラグマティズムと教育——デューイからローティへ——』八千代出版。
- 山本雄二, 2003, 「テキストと主体形成」, 森重雄・田中智志編, 『〈近代教育〉の社会理論』勁草書房: 129-62.
- 渡辺秀樹, 1996, 「社会化」, 森岡清美・塩原勉・本間康平ら編, 1993, 『新社会学事典』有斐閣: 596.
- , 1992, 「家族と社会化研究の展開」『教育社会学研究』50: 49-65.

e-mail: mukuo@1999.jukuin.keio.ac.jp